

肺癌患者における抑うつと予後との関係

かわ さき ゆう じ¹⁾ こしょうぶ とも あき わた なべ えつ こ¹⁾
 河 崎 雄 司¹⁾ 小勝負 知 明²⁾ 渡 部 悦 子¹⁾
 とう げ ひろ かず¹⁾ とく やす ひろ かず おか さき りょう た³⁾
 唐 下 泰 一¹⁾ 徳 安 宏 和¹⁾ 岡 崎 亮 太³⁾
 うえ だ やす ひと なか たに しげる
 上 田 康 仁³⁾ 中 谷 葆²⁾

キーワード：肺癌，抑うつ，予後

要 旨

肺癌患者で抑うつと予後との関係について調べた。抑うつ傾向のある群は抑うつ傾向のない群に比べて生存期間（日）の短いことを認め、抑うつが予後因子である可能性が考えられた。予後因子であるとすれば、抑うつへの介入は肺癌患者の予後を改善させる可能性が考えられる。

はじめに

Brundageらは肺癌の予後因子についての文献をレビューし、抑うつは予後因子であると述べている¹⁾。一方、Petticrewらは同様に文献をレビューし、抑うつには言及していないが、他の否認、闘争心、無気力、絶望感などの精神状態が肺癌を含めたがんの予後に関連性をもつことを支持するエビデンスはないと述べている²⁾。現在のところ、抑うつが肺癌の予後因子であるかどうかは明らかではない。そこで、肺癌患者の抑うつと予後との関係について調べ、また、予後改善の立場から抑うつへの介入の意義についても若干の考察

を加える。

対象と方法

対象は肺癌の病名告知時後7日から10日に抑うつを質問票（SDS：Zung Self-Rating Depression Scale）（表1）で調べ、その後に化学療法、一部は放射線療法も加え1年～3年のフォローをおこなった男性非小細胞肺癌患者、死亡33名と生存3名のn=36であった（表2）。

まず、患者をSDS 40点未満（抑うつ傾向なし）と40点以上（抑うつ傾向あり）の2群に分け³⁾、SDS調査時から死亡日までの生存期間（日）と抑うつとの関係をKaplan-Meier法により調べ、logrank testにて有意差検定をおこなった。尚、分析時まで生存していた患者では生存が確認された最終日までを生存期間（日）とした。次に、抑うつ傾向なし、ありとECOG Performance

Yuji KAWASAKI et al.

1) 松江赤十字病院呼吸器科

2) 独立行政法人国立病院機構米子医療センター内科

3) 鳥取大学医学部分子制御内科(元松江赤十字病院呼吸器科)

連絡先：〒690-8506 島根県松江市母衣町200番地